

知っちゃった? 「小京都 中村」

公式な「小京都」とは…

公式に小京都と名乗れるのは全国京都会議に参加した自治体で、

1. 京都に似た自然と景観
2. 京都との歴史的なつながり
3. 伝統的な産業と芸能があること

の1つ以上に合致していれば承認され、昭和60年に26市町と京都とで発足しました。



一條大祭 ▶
(毎年11月22日～24日)



◀▲ 土佐一條 公家行列 藤まつり
(毎年5月3日)



きっかけは中村から…

昭和57年、中村から2人の正装した男性が京都の観光協会を表敬訪問しました。目的は11月に行われる「一條大祭」で奉納する御神火を、京都下鴨神社から受け取って持ち帰るためでした。「京都との繋がりをここまで大切に…」京都の観光協会の方が感激してくださりこれが一つのきっかけとなって3年後に全国京都会議が発足したのです。



長宗我部地検帳 天正17年(1589)中村郷「中村」復元図
中村御所は、現在一條神社のある小森山を中心に
予土歴史文化研究会「土佐の『小京都』中村」より

公家文化が残る「土佐の小京都」

なんと「御所館跡」もあります

中村は、応仁の乱の戦火を避けた前関白、一條教房公が、中村御所を構えた場所（当時は小森山と呼ばれたの一條神社周辺）です。都を懐かしんだ一條公は、京都を模した碁盤の目状の街づくりを始めました。鴨川、東山など京都に見立てた地名やゆかりの神社などもあちこちに残っていますし、大文字の送り火など京文化とのつながりも見られます。

「小京都」3条件クリアの中村

一條大祭の御神火はその後も毎年下鴨神社にいただきに出向き、京都に繋がる熱い思いは今でも変わらず続いています。

現在、全国京都会議に参加している自治体は38になりますが、明治になるまで城下町だったり、門前町だったりしていた所が多く、御所館跡まであり公家文化の残る「小京都」の条件を3つとも備えているのはこの四万十市中村だけなのです。

「土佐一條時代 107年の人々」を 四万十玉姫の会がご紹介いたします

～ 教房公中村下向から 渡川合戦で兼定公が中村を去るまで ～

玉姫の義祖父

一條教房 (1423-1480年)

土佐一條の祖を築く。才人一條兼良の長男。応仁の乱を機に、46才で一條家の莊園である幡多莊に下向。莊園の立て直しを進めつつ、中村が対明貿易の中継地として栄える基礎を築く。享年58才。没後冥福を祈って多くの人々が仏門に入ったと伝えられ、教房が幡多莊の人びとに慕われていたことがうかがえる。妙華寺殿と贈り名 墓は中村丸の内に五輪の塔あり。

関白について

公家の最高位で天皇を補佐する官職。5摂家でないとない。一條内基の関白の翌年には秀吉が近衛家の猶子になって着任している。

玉姫の義弟

京一條氏
第11代

関白 房通

京一條氏
第13代

関白 内基

京一條氏
第12代

関白 兼冬

摂政関白太政大臣

一條兼良

京一條氏
第8代

京一條氏
第9代

從一位 関白
教房

土佐一條氏
初代

正三位 権左納言
房家

土佐一條氏
二代

正三位 権中納言
房冬

土佐一條氏
三代

從三位 右近衛中将
房基

土佐一條氏
四代

從三位 権中納言
兼定

從四位下・左近衛中将
一條内政

玉姫のひ孫

一條内政 大津御所 (1562-1585年)

父兼定の隠居後、長宗我部元親によって大津に移され、娘を嫁に。渡川合戦では父兼定と対峙したと判明。元親に追放される。

玉姫の義父

一條房家 (1477-1539年)

母は地元の実力者加久見氏(土佐清水市)の娘。幡多の国人たちに請われて中村にとどまる。中村を京に見立てて街並み・地名を作成。幡多莊を安定的な莊園として発展させ、土佐一條氏全盛時代をつくる。享年63才。墓は宿毛市平田 藤林寺に。

玉姫の夫

一條房冬 (1498-1541年)

治世は2年だが、実質は一條家の栄華の時代を京と行き来し過ごし、宮家の姫、玉姫を妻に迎えている。朝廷への多額の献金も房冬の名前で贈られており、対明貿易の利益もあってか、裕福ぶりうかがえる。享年44歳。墓は円明院 広大な寺だったが、江戸時代には壊される。

玉姫の孫

一條兼定 (1543-1585年)

幡多に暮らした土佐一條家最後の当主。父房基が若くして自害したため7歳で家督を継ぐ。妻は大友宗麟の次女。長宗我部元親の調略で家臣団に追い出され豊後臼杵に。豊後でキリスト教の洗礼を受けドン・パウロとなる。宗麟の支援を得て中村奪還に乗り出すが、渡川合戦で敗退。伊予戸島で亡くなる。享年42歳。兼定の寵愛した藤(「咲かずの藤」)は一條神社創建の由来としても知られる。墓は宇和島市戸島 龍集寺に宝篋印塔の墓あり。

玉姫の子

一條房基 (1522-1549年)

繁栄を極めた祖父、父が相次いで亡くなり、20歳で後を継ぐ。妻は九州の大友宗麟の姉を迎えている。この縁で大友氏を応援して伊予に攻め入って戦国大名化したのが、28才で自害してしまう。墓は光寿寺 江戸時代に中村小性町に房基供養塔建立。

伏見宮邦高親王の王女
玉姫

朝廷への献上品には「鯨」も！

教房公は、京一條家再建に材木を、房家、房冬公の時代は朝廷にも貢物をしたがやと。大きな戦乱もなく羽振りもよおて、献金するほか、年始には扇や紙を献上し、貢物の目録には「鯨」の記載もあるがです。

「おまち中村」

中村に「おまち」は歴史ある町

として明記されるのは長宗我部時代、検帳からやけど、その場所、一条の形は一条時代にその基盤がでさちようがです。

中村に寝殿造の御所館が

長曾我部地検帳から読み取れる「お土居」と書かれた今、一条神社の森山と呼ばれる、現在の商店街、村場所を中心、天神橋田村、車場から京町一丁目、目にあたる写真館横から本町一丁目、寝殿造の大きな場所、蹴鞠場や寝殿造の遊亭があったといわれ、貴族の雅な館やったがやろうね。

小京都中村 「こんな話しあれ」

京の一條家も 土佐一條家の血筋

京一條家とは別に「土佐一條家」を起した房家公やけん、次男の房通は本家の京一條家の養子になり若くして閑白に。房家の孫らあ二人が次の閑白になつちようなど京の一條家とは深い関係があるがです。

どの時代にも大切に思われ、

慕われた玉姫さま

玉姫さまは、ご主人が亡くなられてから出家され、没後は真蔵院（のちの常照寺）に祀られました。江戸時代に京の一條家が荒れたお寺を再建したがやけん、明治の廃仏毀釈でまた壊され、現在の「五輪の塔」は明治時代に今の場所に移設されたがです。

「お化粧の井戸」は当時から

一條神社境内にある「お化粧の井戸」は、当時一條氏が使った七つの井戸で唯一現存する一枚岩をくりぬいた立派なもの。今は高くつきあげられちよう、女ど、当時は水面がもつと近こうで、官や侍女がお化粧に使った井戸といわれちようがです。



四万十玉姫の会HP



「こんな話」は「幡多弁」でご紹介します。「高知弁」とは違うちょうと優しい語尾で古い言い回しも残っています。

土佐一條時代 関連年表

西暦(年)	時代	和暦	中村	土佐一條氏関連 高知 京都
1250	鎌倉時代	建長2年	幡多 はたのしやう 荘	幡多荘、九條家から一條家へ (本荘(中村)大方荘、山田荘、以南村、久礼別府)
1432	室町時代	永享4年		一條兼良(教房父)摂政 その後、後花園天皇・後土御門天皇の関白 (古典学者、和歌集)
1458		長祿2年		一條教房 後花園天皇の関白となる(38才)
1467	室町(戦国)時代	応仁元年	土佐一條氏	応仁・文明の乱はじまる 京の一條氏館、焼失(時の関白一條兼良)
1468		応仁2年		前関白 一條教房、幡多に向かう 9月、堺を出発、10月中旬に中村着 坂本の中坊に御所完成まで滞在か 教房、幡多荘を回復に尽力 京都風の町づくりに 不破八幡宮を創建 遣明帰朝船幡多へ寄港
1469		文明1年		一條房家生まれる(母は教房後妻、加久見氏の娘)
1477		文明9年		応仁・文明の乱終わる 京一條邸造営のため材木・板などを送る
1479		文明11年		一條教房 中村で亡くなる(58才) 墓は妙華寺、現在の奥御前に (山崩れで埋まっていたものを明治時代に有志が発掘、一條家が補足再興)
1480		文明12年		一條家臣内紛、房家足摺へ、その後以南村へ。遣明船、幡多で越年
1483		文明15年		初代一條房家、元服 中村の町を京都風に整備 土佐国司に (お祇園さん建立 お化粧の井戸もこの時代に)
1494		明応3年		房家、後妻を大内氏より迎える。六男晴持を大内家へ養子に出す。 幡多中村にて房冬生まれる(母は藤原氏から)
1498		明応7年		房家、次男房通を伴い上洛。房通京一條家の養嫡子に。藤林寺を建てる
1516		永正13年		高岡郡全部が一條領となる
1517		永正14年		伏見宮邦高親王の王女玉姫 2代房冬に嫁ぐ 6月22日伏見出発 仁和寺真光院尊海、金剛福寺へ
1521		永正18年		3代一條房基生まれる
1522		大永19年		初代 一條房家 中村で亡くなる 63才 墓は平田の藤林寺
1539		天文8年		2代 一條房冬 中村で亡くなる 44才 墓は円明院(広大な寺だったが、 山内氏入国後に壊されている)
1541		天文10年		8月22日 玉姫亡くなられ、真蔵院(後の常照寺)に葬られる (玉姫の墓は中村小学校向いに)
1547		天文16年		3代一條房基、自害 28才 墓は光寿寺 江戸時代に供養塔が建立される 2年後4代兼定、9才で京で元服
1549		天文18年		兼定、宇都宮氏と同盟し伊予へ侵攻(永祿11年まで)
1566		永祿9年		4代一條兼定 出家(権中納言左近衛中将従三位) 子の内政、京一條家 内基の後ろ盾にて元服。内政大津御所へ(妻は長宗我部元親娘)
1573	安土桃山時代	天正元年		4代一條兼定、豊後大友氏の元へ(一條神社の咲かずの藤の歌) 中村城に元親弟吉良義貞が入る 兼定豊後にてキリスト教徒に
1574		天正2年		一條兼定、渡川(四万十川)合戦に敗れ、伊予に逃れる 土佐一條時代は終わる
1575		天正3年	長宗我部氏	長宗我部元親、四国ほぼ統一 7月1日一條兼定、戸島で亡くなる(42才) 8月、秀吉の四国攻めにより、土佐一国の領土となる
1585		天正13年		
1848	江戸時代	嘉永年間	幡多郡奉行	荒廃していた玉姫の墓のある常照寺は、京一條家により門跡の寺の様に 立派に改修される
1862		文久2年		土佐一條氏をまつる一條神社が御所跡に創建される 以降、一條大祭が始まる